



はうがち過ぎでしようか。

## 中国の濃い影

衛藤 私は、各国の総理なり元首なりが甲意を表し到北京に来るのを断わったということとは、もっと素直に考えていたんです。もしも毛沢東が亡くなった場合であれば、そういう問題もあり得るでしょう。たとえばかつてドゴールが死んだとき、ケネディが死んだときのように、それぞれの国の指導者が一堂に会するということもあるかもしれないけれど、周恩来の場合は國務院総理ですからね。ですから、中国は周恩来の地位ということを考えてのだろうとばくは素直に考えていたんです。

それから、朝貢国の態度という御批判ですね。私は一貫して、日本人の中国に対する姿勢について、中国に対して恨みがましく言うのは間違いだと思ってるんですよ。いま中嶋君が正しく指摘された通り新聞にせよ政府の態度にせよ、純粋に日本の問題ですね。中国共産党から圧力受けたとか、中国共産党がこういう活字でこう書きなさいと言ったわけでは毛頭ない。自発的に日本人がしたこと

です。もしわれわれがそれを批判するとすれば、それは日本人を批判すべきだというのが、ばくの一貫した態度なんです。

かつて日本が強かったときに、不必要なまでに日本に阿諛迎合した中国人もいましたし、それから、占領時代に、不必要なまでに米占領軍に迎合した日本人もいたわけですよ。そういうのと同じ形で批判すべきであって、日本人が米占領軍に阿諛迎合した、だから占領軍はけしからんというのの当らないだろう。そういうふうに見てるんですね。

おっしゃるとおり、あの日の新聞は異常だったと思います。「朝日新聞」を例にとれば、周恩来関係の記事は六面にわたってとり上げられており、グロムイコの来日は一面のわずか三段の記事です。しかし、それを異常と感ぜしめないほどに、中国が日本人の心の中に投げかけているカゲというのは濃いんじゃないか。それはけしからんと言って片づく問題ではない。

日本という国は長い間漢文明圏のすみこにあつて、漢文明圏の中心に憧れを抱いてきた。そういう長い歴史を背景に背負っている。その中国に、新しい強大な統一国家がで

ろうと思う。

## 上海時代の肅清工作

衛藤 たとえば昭和十六年の夏ごろの日本の一流紙を見てごらんさない。あれを見ていますと、まさに重大な決心をしなきゃならない、英米と戦争しなきゃならないというふう

に、あおりにあおっているわけです。そのときに、海軍軍令部にしても、陸軍参謀本部にしても、いくらウォー・ゲームをやっても勝つめどがつかなかった。ところが当時の「空気が戦争への道を作ってしまった。それと同じで、現在の周恩来の死についてだけ、新聞の報道の異常ぶりをおかしいというのは当らない。前からそうだったんです。それが特殊であるというふうにはばくは考えない。

それから中嶋君は西安事件が周恩来のバイライトだといったけれども、それは表面上のことだと思ふんです。あまり触れたくはないけど、周恩来がイチカバチカ、乗るか反るかだったのは一九二九年、三〇年、上海地下活動時代の肅清工作だったと思います。彼は当時の党監察機関の責任者でしたからね。党の異端分子を大胆に処理しています。

きてきた。そうすると、中嶋君の言われる朝貢者の心理になるだろうと思うんです。われわれの心のどこかにそういう心理があると思ふんです。私の場合にも常にそういうものがある。そういう自分の内なるものに対して闘ってゆくのが中国に対する正しい姿勢だろうと思ってるんです。ばくが仮に「朝日」の編集局長であると仮定して、「読売」「毎日」が大きな活字でやりそうとき、チェコスロバキアかポーランドの首相が死んだのと同じような淡々とした報道ができるかどうか、これはやっぱりできないと思いますね。

中嶋 それにしてもどの紙面も同じで表面的な追悼と賛辞に終始し、かなりステレオタイプの報道だったような気がします。周恩来の生涯といった場合に、建国後のことはともかく、やっぱり中国革命史において、彼の一番ドラマティックな、歴史的な役まわりというのは、いわば西安事変だと私は思うんです。西安事変における周恩来の役割にはさまざまな評価があり、周恩来だけが英雄的に扱われるのはおかしいという点もふくめてなんです。でもかくこの点についてふれた報道がなかった。私もテレビにひっぱり出された

中嶋 周恩来が特務的なキャリアを持っていたことについては、今回だれも触れてないですね。

衛藤 彼は当時フランス租界における中国共産党の地下組織の肅清の責任者だったんです。それも理由のひとつで彼はフランス租界から逃げて、江西の山奥に行くんですね。フランス警察が彼に神経質になって、それで彼はその時ヒゲを生やし、カトリックの神父のみなりをするんですよ。それが彼の渾名の「ヒゲ」「神父」の由来です。それがばくは彼にとつていちばん大きい事件だったと思えます。西安事件は表面的には非常にドラマティックだった。張学良は蒋介石を捕えたもののオドオドしてしまっている。楊虎城などは張り切って蒋介石を殺そうというわけです。周は張学良がどうしていいかわからない時に、蒋介石を助けて救国の英雄として抗日統一戦線を作ろうじゃないかという堂々たる説得をするんですね。その時西安の共産党の下級幹部が蒋介石の処刑を主張するのを、ものすごい説得力で押えていきました。それははなやかなものだったらしいですね。

中嶋 さきほど先生が、「流れ」というこ

その場の空気によって、政治もマスコミも、国民感情も支配されるんで、それは非常に好ましくないことであると思います。しかし、研究者としてのわれわれは、そういう空気が無理なく出てくるという事実に着目すべきだ

と、それからそれに逆らう、あるいは棒さす  
ということを言われましたが、中国ではまさ  
に潮流と反潮流ということが、文革以後ずつ  
と言われてきていましたね。その点を毛沢東  
と比較しながら周恩来について見てきます  
と、毛沢東は必ずしも流れだけに乗っていな  
くて、むしろ流れに逆らわざるところがたく  
さんあったように思うんです。現に遵義會議  
などがそうですし、最近明らかになったドキ  
ュメントによりますと、四二、三年ごろま  
で、まだまだ党内には王明・博古路線の影響  
があった、毛沢東がようやく主導権を確立し  
たのは四三年、つまり七全大会の二、三年前  
ではないかという見方も、例の『延安日記』  
のウラジミロフなんかの記録に出ています  
ね。

これに対して周恩来を見ておきますと、あ  
る意味でつねに潮流の側にあつて、流れとい  
うものを、むしろ彼自身もつくりながら流れ  
に乗ってきたような気がするんです。その流  
れに乗ることが、周恩来の保身なり、あるい  
はある意味での政治的な野心なり、そういう  
ものであったといふふうに言う人もいるんで  
すね。「不倒翁」であるという評価について

イメージがあつて、周恩来のほうが、より民  
衆から迎えられていたような側面があつたん  
じゃないかと思われます。  
言葉はちょっと強すぎるかもしれませんが、  
周恩来というのにはある意味で、一貫して  
潜在的な毛沢東批判者ではなかったかとい  
う気がするんです。そうしますと、仮に毛沢東  
亡きあと、周恩来がもし健在であれば、毛沢  
東政治というものを、もういっぺん歴史の中  
に相対化する、スターリン批判みたいにドラ  
スティックなことにはないにせよ、そういうた  
役割を演じたかもしれない。私の申し上げた  
周恩来像、あるいは誤っているかもしれないま  
んが、衛藤先生いかがでしょうか。

衛藤 私のも文革の時、ずっと香港におりま  
したけれども、左派も反中共分子も含めて、  
中国人の間では周恩来がいる限り中華人民共  
和国は大丈夫だ、彼が失脚した時が危いとい  
うことを、みんな言っていましたね。おっし  
やるとおりだと思います。それから、毛沢東  
に対する潜在的な批判者であつたという点で  
すが、周恩来は同時に最もよき協力者であつ  
たわけですね。(笑)

は周知のとおりです。そこで毛沢東の場合に  
は、中国民族の命運を孤僧のような立場から  
考える革命家である。これに対して周恩来は、  
ある意味で国家ないし国益というものをいつ  
も考えていた。そういう使命感に立脚して、  
政治の流れを自分がつくっていくことが必要  
なんだと考えていたように思えるんです。遵  
義會議で毛沢東に党内指導権を委ねていく時  
もそうでしたでしょうし、文化大革命の、建  
国後、周恩来にとつてのいちばん大きな岐路  
であると思われた六五、六年に、劉少奇や鄧  
小平などと袂をわかつて毛沢東に忠誠を誓っ  
ていくときもそうでした。いま毛沢東に賭け  
なければ国危うしという周恩来の立場、こ  
ういうものを見てくると、周恩来は単なる日和  
見主義者、機会主義者、時流迎合主義者では  
なく、そういうものを超えた一種の政治戦略  
家だつたような気がします。ですから私の考  
える周恩来像から言うと、じつは毛沢東亡き  
あとに、もう一つ大きな仕事をしたかつたん  
じゃないかという気がするんです。周恩来は  
毛沢東政治の尻拭いをいつもしてきたとい  
うか、いまはそういうことに徹するんだとい  
う使命感に立脚して彼の役割を果たしてきた。

けれども、比較的客観的に中国の現代史を見  
ようという人たちの間で、周恩来が馮道にな  
るか胡惟庸になるかという問題があつたわけ  
ですね。馮道という人は唐、晋、契丹、漢、  
周五代、八姓に仕えて、儒教的な倫理からい  
えば変節者といわれたかもしれないけど、し  
かし彼は、ああいう乱世の中で新しい政治秩  
序をつくりたいという異常な情熱を持ち、終  
りを全うした人ですね。ところが一方の胡惟  
庸は洪武帝の時の中書省參知政事です。彼は  
洪武帝が天下を統一していく過程で、洪武帝  
自身は軍事的な組織を握っている時に、いわ  
ば官僚制をつくっていった点で、大いに功績  
のあつた人ですけれども、あまり権力をほし  
いままにしたというので、最後に殺されるわ  
けですね。

周恩来の場合、中国共産党の主導権がいろ  
いろな人に移っていても、彼はつねにNO  
・2とか、NO・3の立場にいて、いわば馮  
道としておのれの役割を全うしたということ  
はいえるんじゃないですか。で、胡惟庸にな  
らなかつたというのは、やはり彼がそういう  
意味での保身の術を十分に心得ていて、みず  
からの役割に、きわめて正確な認識を持つて

ですから毛沢東亡きあとの周恩来が、中国の  
政治をどうつくりかえていくかを、じつはわ  
れわれ見たかつたわけですね。それは結局見る  
ことができなかつた。われわれにとつて残念  
であり、中国民衆にとつて残念である以上  
に、これは周恩来にとつて、たいへん無念な  
ことではなかつたかという気がいたします。

### 潜在的な毛批判者？

中嶋 私が香港にいた時の経験ですけど、  
大陸からの難民に何人かインタビューなどし  
たことがあります。周恩来の悪口を言う人  
はだれもいないですね。みんな自分が逃れ  
てきた中国の将来について周恩来に期待して  
いるということ言うわけです。実際に周恩  
来の政治にはもつと緻密な計算があり、また  
軍の中にも、あるいは特務、公安関係にもい  
ろいろ力があつたようですから、非常に冷酷  
な政治をやつてきたのかもしれないけど、と  
にかくいわれる中国の民衆には、毛沢東はか  
なりわがままで、むちゃくちゃなことをやつ  
て、たまらないことがあるけれども、それを  
いつも調整し、ハーモナイズし、ある意味で  
は潤滑油になつてくれるのが周恩来だとい  
う

いたんじゃないかという気がしますね。  
中嶋 馮道といえば、たしか「事はまさに  
実を務むべし」という言葉を吐いた宰相です  
けれども、周恩来について実務派という形容  
詞があることと、まさにびつたりという気が  
しますね。

### 周の狙つたもの

衛藤 さきほどの話にもどりますが、周恩  
来の生き方を見ていると、たとえば李立三が  
勢いを得てきた時に、彼は李立三を立てる。  
と同時に李立三の道が失敗した時に、彼は李  
立三の批判者として、いわばコミンテルンの  
側から批判者に立たされたわけだけど、しか  
しそこで李立三が倒れたあと、ソ連から帰つ  
てきた留学生たちに、彼はサッサとリーダー  
の席を譲って、陳紹禹(王明)がNO・1に  
なるのを素直に見ていましたね。さきほどの  
遵義會議の時もそうですし、そのあと五六年  
に鄧小平が登場した時も、自分はNO・3に  
あまんじています。五九年の四月に国家主席  
をきめる時にも、発表の当日まで外国ではも  
つぱら国家主席は周恩来だといわれ、その予  
定原稿さえ書いていた人がたくさんいたの

に、実際は劉少奇が国家主席になって、周はNO・3の地位にあまんじて退いています。林彪が文革で擡頭してきたら、「毛主席と最も親密なる戦友」と呼んで林彪を讃えたのも彼ですね。だからこそ、彼は彼なりの役割を果たしたんじゃないかと思う。彼なりの役割というけれども、それじゃ、彼の持っていた情熱というのは何だろうか。私は、中国の富国強兵だと思うんですよ。中国の統一と中国が強くなることだったと思うんですよ。

**中嶋** ぼくがさっき申し上げた国家的使命感というの、そういうところだと思いません。そのためには激しい政治の流れの中でいまは毛沢東はやっぱり守っていかなければいけないというのが、文革の時に周恩来が毛沢東に賭けた大きな動機だったと思うんですよ。いま衛藤先生がおっしゃった五〇年代後半の周恩来は、どちらかというと、実務派であると同時に穏健派ですね。穏健派である周恩来が、大躍進政策についてどう対応したかという、これは是非々々主義だったと思うんですよ。つまり大躍進政策は、毛沢東が一所懸命に号令をかけたわけで、彭德懷以下これに対する批判勢力が出てきますね。国務院の中に

も、たくさん彭德懷に同調するものが出てきます。周恩来はその時はうまく退いて、是非々の立場をとった。直接毛沢東を諷めたのが彭德懷であって、周はその役割を彭德懷にやらせたわけです。しかし彼の本心は、どちらかというと大躍進政策に批判的だったから、それをうまく劉少奇のほうに結んでいて、六〇年代前半、いわば経済調整政策に持っていく。

同じようなことが、中ソ関係でも言えるんじゃないかと思うんですよ。中ソ論争が六〇年から公然化してきて、六三年に鄧小平がソ連に行つてスロソフとわたり合い、決裂するわけでしょう。あの時も周恩来は、決裂させる場面は鄧小平にやらせているわけですね。そして自分は、ある意味ではその事態からうまく逃れています。周恩来という人は、そういう非常に繊細な読みのできる人で、たいへん計算のうまい戦略家だったんじゃないかという気がしますね。

### 周はタナあげされたのか

**中嶋** 文化大革命当時の周恩来について、私は非常に鮮烈な記憶があるんですよ。六六年

秋に私が中国へ行つたとき、丁度文革の最中ですが、孫文生誕百周年記念の人民大会堂における国事に招かれて参列しました。日本人は孫文にかわり合いがあるというので一番いい席に並ぶことができました。私たちは周恩来ら中国側首脳と一緒にカメラにおさまったのですが、そこには劉少奇や鄧小平は加わらず、別の入口から入った劉少奇や鄧小平も記念式典のヒナ壇に並んでいないんですよ。彼らは明らかに批判の渦中にあることがわかるように、新華社の記者は劉少奇と鄧小平にはカメラを向けない。やがて、孫文未亡人の宋慶齡とか、廖承志のお母さんである何香凝とかが演説し、最後に周恩来が演壇に立ちました。彼はヒナ壇にいた劉少奇や鄧小平を尻目に、孫文は晩節を全うした革命家であった、革命家はいくら功績があっても晩節を全うしなければいけないと演説し、最後に、ややハスキーなかん高い声で「毛沢東思想万歳、毛沢東主席万歳、万万歳」と必死になって叫んだんです。いまもその声は私の耳に残っています。周恩来ほどの人物がなぜここまで必死に毛沢東礼讃をやらなくてはならないのか、と思われるほどでした。

周恩来は文革をこういう形で乗りきり、やがて毛沢東の、あるいは林彪の奪権闘争の勝利へと流れを変えていく。その結果、奪権闘争に活躍した林彪以下の軍幹部が九全大会前後非常にのさばってきますね。その時点で、行政官僚・実務官僚の最高指導者としての周恩来と軍幹部との間に、深刻な対立が起つたような気がします。これが軍官僚と党官僚・行政官僚の連合との対立となつて林彪事件が起つたのではないかと。通説のように、林彪が毛沢東にたてついたらとすると、あまりにも不自然な謎が多すぎます。私はむしろ周恩来を含めて当時、軍と対立していた人たちが、一種の予防クーデタをやつたのではないかと考えます。これが林彪事件ではなかったのかという気がするんですよ。

そうなりますと、周恩来が十全大会で「七五七工程」紀要」についてふれた意味が明らかになってくるのではないかと思うんですよ。なぜかという、あの「七五七工程」紀要」の中には、毛沢東思想は孔孟の衣を被つたマルクスレーニン主義で、実は孔孟の道を歩むものであるとか、秦の始皇帝だとか、毛沢東にとつても聞き捨てならん言葉がたくさん含

まれているんですよ。周恩来が「七五七工程」紀要」に公式に触れて、この文献についてはみんながすでに読んでいるから林彪事件についてはもう説明するまでもないという公式の場で発言することによって、「七五七工程」紀要」をオーソライズした。これは毛沢東にとつては、大変イヤなことを言ってくれたな、という気がするんじゃないかと思うのです。その後見しておりますと、毛沢東は初めから林彪を擁護していたのではない、林彪を危険視していたのだという江青夫人に宛てた私信などが発表されたりして、そして批林批孔運動が起つてきます。毛沢東ないしは文革派にとつては、あんなことを周恩来に言われた以上、毛沢東こそ孔子を批判していたんだという論理が必要になる。秦の始皇帝は専制君主ではなく革命君主だという論理が必要になる。そして批林批孔運動になる。このときには、周恩来はむしろ守勢に立たされていったと思うんですよ。この仮説を続けていきますと、周恩来は毛沢東をうまく称えながらも、毛沢東体制の中において、中国民衆の中に、毛沢東は現代の始皇帝であり、あるいは孔孟の道を歩むものである、あるいは、実は

毛沢東というのはそういう古い家父長的な専制主義者だということを、間接的な手段を通じてながら、また林彪事件の事後処理を利用して伝えようとしたのではないかと、周恩来はそこまでやろうとしたのではないかと私は思えてくるんですよ。そういう周恩来なりの非毛沢東化への戦略というもの——つまり毛沢東体制下における非毛沢東化の戦略が、それ以後ある意味で露見し、うまくいかななくなってきた。それが批林批孔運動から「水滸伝」批判運動まで連なってきたということではないのか。従つてこの一年ぐらい周恩来が政治の第一線から退いたのももちろんガンのためだったのです。が、しかしたんに病気だけではないのではな

いか。

その理由として鄧小平などは周恩来が病気であるということ、外国人の前であれば何回も強調して、いかにも周恩来は病人で、もう政治を担当できないということ、必要以上に感ぜさせるほど、周恩来の病気が強調されましたね。これはもちろん自然に考えれば、重病であったからというふうには素直に考えることもできませんけれども、どうも林彪事

件以後の政治の流れの中には、きわめて不透明な理解したいことがあるだけに、周恩来のこの一年ぐらゐの動静についてもまだまだわからない点が残されてるのではないでしようか。九日、周恩来の死が発表されて、周恩来は単に病気にすぎなかった、それ以外に何の理由もなかったことが明らかになったという論者もいますが、私は、以上のような見方の方が辻褃が合うと思うんです。これはあくまでも仮説ですが、衛藤先生はどうお考えになりますか。

### 時代が人を生む

衛藤 私は仮説はいろいろ立ててはみますが、その一つだけを取ることはしない。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。仮説である以上、いくつも仮説は出すべきで、一つだけを出して断定してしまつたら、それはジャーナリストイックだと思ふ。

中嶋 もちろん私は間違つていた場合には責任をとるつもりで発言しているんですが、いま申し上げた仮説は、ここ数年来持ち続けている仮説なんです。もちろん仮説というものは、スベキュレーションを含みますから、

もつともっと情報の裏付け、あるいは歴史的事実が出てこないとい何とも言えません。しかし、いろいろな状況証拠なり、現状分析の中で出てくる仮説としては、どうもそんな気がして仕方がないんですけれども……。

衛藤 たえば文革でああいう混乱を続けなければ当然生産が下がる。生産が下がるから国を守るためには、文革のあいつた急進的な政策をいつまでも続けることはできない。これは論理なんです。人間はいつか死なねばならないというのは論理ですが、明日死ぬか十年後に死ぬかというのを論じるのは、スベキュレーションです。君が仮説ですって言われたから、それはそれで結構なんです。やはり仮説なら複数出した方がいいと思う。そしてその上で、どうもこの仮説の公算が一番高い、と説いた方がいいと思いますね。

話を周恩来に戻しますけどね。周恩来という人は、やはり中国近代史のなかでは大変な偉材であつたと思います。それは毛沢東というような何百年に一度しか出てこないような、まさに秦の始皇帝に匹敵するのかもしれないけれども、そういう人物の陰に隠れては

いますが、周恩来は大変な人物だと思ひます。その大人物を中国の「五・四」前後の名状すべからざる混乱が生み出したと思うんですが、彼はああいう乱世でなかつたら、どこかの小官僚で終つたかもしれないし、のん気な地主で終つていたかもしれない。乱世であつたればこそ、彼は自己の才能を伸ばし、それをフルに使うことができた。

それからもう一つ、彼が中国共産党に賭けたということが、彼の才能を著しく伸ばしたんだらうと思うんです。周恩来がもし愛国者であつても、国民党に賭けていたら、ああはいかなかつたらうと思ひます。周恩来が、かに国民党に入つていたら、国民党はいまのような状況に落ちぶれなかつたかといふとそうはいかなかつた、やはり落ちぶれたらうと思う。彼を大人物ならしめた土壌として、衰亡の危機にあつた軍閥時代の中国と、中国共産党の成長とを忘れてはならない。時代が人を生むのです。ところで、話はとびますが、周恩来の日本留学のことについては、ずいぶんいろいろな説があるようですが、その点どうなんでしょうか。

中嶋 早稲田に通つたという説もあります

けれども、法政に籍を置いたというのがたしかなようです。二、三年前、周恩来から直接に聞いたこととして新聞に書いた人がいましたね。

衛藤 そのころは、東大でもそうですけど、籍を置かなくても講義が聞けたしね、現に彼は京都へ行って河上肇さんの影響を受けた。これはほぼ定説になつてる。それじゃ京都帝大に籍を置いたかといふと、そういうこととはない。だれか周恩来の日本留学時代を詳しく調べてみるといいですね。日本にいた時代もはっきりしてないし……。

中嶋 彼の年齢についても、出生地と同じように二つ三つ説があるわけですね。新華社が発表した年齢は、どうも一年違つてるんじゃないかといふ人もいます。

衛藤 新華社の発表では一八九八年生まれでした。

中嶋 ええ。それよりも一つ若いのではないかという説もありますね。これはまた聞きですけれども、池田正之輔さんが周恩来に、あなたは何年何月生まれで干支はなんですか、それじゃわたしと何カ月違いますか、とつたような話をしたことがあるんだそうです。

す。そのときの話でも新華社の発表とは違つてるようですね。そういう風に周恩来の青年時代はあまりはっきりしないのです。

衛藤 鄧小平だつて劉少奇だつてははっきりしない。毛さんがはっきりしているのは、エドガー・スノーが、毛さんがひまなごころに毎日聞き出して、それをスノーがよく記録しているからですね。やはり革命家というのは、わりに若いときのことはわからないんじゃないですか。

### 周が生きのびていたら

中嶋 話は変わりますが、わたくしはやはり毛なきあとの周恩来の時代を見たかたです。周恩来の死を聞いて、毛沢東はなんと運の強い人かと思ひました。

衛藤 まさにそうですね。中嶋 毛沢東はがっかりして、ショックを受けているだろうという見方があるけれども、私に言わせれば、ほつとしたという面があるんじゃないか。

衛藤 政治家には死に時があると思うんですよ。佐藤栄作も死に時は非常によかつた。それから蔣介石はさぞ口惜しかつたらうと思

うんです。そういう意味では、毛さんというのは恵まれた星の下に生まれた、たいへん運勢の強い人だといふ気がしますね。毛さんが先に死んで周さんがそのあとを收拾するといふような状況だつたら、さつき中嶋君が言われたような公算は、非常に大きかつたと思ひますね。スターリン死後のマレンコフ、フルシチョフとまでは言わないけれども、いわば実務派として毛路線の修正は、ずいぶん行なわれたんじゃないか。これこそスベキュレーションで、そうであるかもしれない、そうでないかもしれないけれども。

たとえばこんど教育部長の周榮鑫が批判されましたが、いま中国で行なわれている一種の教育論争が私みたいな大学教師には痛いほどわかるんですね。現在の中国の教育制度でいくと、職場における模範的な人たちが大学へ行くような仕組みになつてきている。これは日本の大学制度から見ると考えられない。職場における模範といふことは、毛沢東思想をよく学習しているといふことで、日本みたいにイデオロギー・思想に関係なしに、能力さえあれば大学に入れますといふのとまったく違う。思想によって選ぶといふところがあるわ

けです。

そういった学生の選抜方法でやっていきま  
すと、大学の中での科学技術のエリートの能  
力の落ちるのは避けられない。その問題を周  
さんが生きていたら、取り上げざるを得なか  
ったろう。中国が強国になるためには科学技  
術の発達が必要だし、科学技術という分野は  
特殊な才能を持ったエリートがブレイク・ス  
ルー(突破口)をつくっていかねばならなら  
ないところで、集団作業をしていれはなんと  
く進歩するというようなわけにはいかない。  
そっちの面で周さん、生き残ってれば変わ  
った政策、あるいは方針を取り入れていた  
んじゃないかという気がするんですがね。そ  
れを除けば、私は毛さんと周さんのどちらが  
先に亡くなろうと、個人にとっては大きな意  
味があるかもしれないが、中国の歴史の流れ  
としては、いずれにせよ富国強兵の道を歩む  
という点では変わらないと思いますね。

周さんが亡くなって、文革派の力が強くな  
ってくるんじゃないかというようなことがし  
きりにいわれているけれども、文革派と非文  
革派というふうな対立、二元論でもって、中  
国共産党の権力闘争を説明するとすれば、文

理においては毛沢東にたいしても屈折した気  
持ちをもっているでしょうが、同時に周恩来  
に対しても、文革のときのいきさつからして  
肚にいち物もっているはずですね。

衛藤 それはそうでしょう。  
中嶋 周恩来が自分たち実権派を見捨て  
て、あれよあれよという間に毛さんのほうに  
いっちゃったために、実権派はああいう仕儀  
に立ち到ったわけですからね。それこそ鄧小  
平のパーソナリティーを考えてみますと、復  
活するときは周恩来がつくり出した旧幹部  
復活という潮流、つまり脱文革という潮流に  
乗りながら、ひとたび復活してしまえば、そ  
う簡単には周恩来の指示だけで動くとか、周  
恩来路線の部下として動くんじゃない。そこ  
は毛沢東との間も調整しながら、うまく第三

文革擡頭説は成り立ちます。しかし私は、現  
実の政治はもっとドロドロしているだろうと  
思うんですね。たとえば文革のとき鄧小平は  
劉少奇と並び称されてあれだけ批判された。  
それでいて復活した。だれが復活させたか。  
毛沢東が復活させたか私は思うんです。譚震  
林の復活もそうだし、李井泉も羅瑞卿もそう  
だと思えます。もし毛沢東があいつはダメだ  
と言え、復活できない。毛沢東の承認があ  
ったからこそ、復活できたんだらう。

毛さんのそういう人事配置の意図するところ  
は、やはり中国共産党の中に実務家的な要  
素と、急進的な要素と、両方のバランスをと  
ってこうとする点にあったんじゃないか。  
あるいは毛さん自身にそこまでの判断がなく  
ても、すくなくとも毛さんの側近周辺にそう  
いう考え方があったんじゃないか。そう  
とでも考えなければ、文革で追放された、し  
かもものすごく批判された人たちの復活は考  
えられないと思うんです。

### 何もかも承知の上で

中嶋 おそらく最終的には毛沢東がきめた  
ことだろうと私も思います。しかし、そうい

の道をつくってきたのがいまの鄧小平じゃな  
いかと見ているんです。ですからおっしゃる  
ように、二元論だけじゃなくても、もっと非常に  
複雑なものがそこにある。おそらくそのこと  
が、今日の鄧小平の意味での強さである  
とも思います。一方、張春橋の今日のあり方  
を見ても、かつて文革小組に籍を置きながら、  
いまや鄧小平と似たような形で、ある意味で  
毛沢東、あるいは周恩来との間をうまく調整  
しながら、今日の地位をつくっているような  
気がするんです。鄧小平と張春橋という新旧  
実権派を、文革派と穏健派とのあいだにおい  
て三次元で考えた方がいいかもしれません。  
衛藤 私は多年疑問に思っていることがあ  
るんです。周さんほどの偉い人というか実力

う復活幹部に対して、つねに文革派の残党か  
ら、復活させるのはけしからんという批判が  
ありましたでしょう。そこで私はこういうふう  
に考えるんです。たとえば鄧小平の復活を  
考えてみますと、これは旧幹部の復活という  
潮流に乗って復活してきた。つまり林彪事件  
によって中国共産党のリーダーシップの中に  
大きな空白ができて弱体化してしまっただけ  
小平ほどのキャリアと、組織力とバイタリテ  
ィを持っている人物を復権させざるを得ない  
ような潮流が出てきた。そういう状況の中で  
まず何人かの旧幹部が復活してきて、そとい  
う旧幹部復活の波にのって、そのシンボルの  
ような形で鄧小平が出てきた。

### 衛藤 その波を作ったのはだれですか。

中嶋 周恩来だろうと私は思うんです。周  
恩来が脱文革という波を作り、それに乗りな  
がら鄧小平らが復活してきた。ところが、そ  
れじゃ鄧小平は周恩来路線の中で復活して、  
周恩来路線のもとでいまのような地位に辿り  
ついたのかというと、私はそう単純なことでは  
ないと思う。衛藤先生もおっしゃったよう  
に、鄧小平はあれほど毛沢東に罵倒され、江  
青夫人にいじめられましたから、その深層心

者でも、時の流れに従わざるを得ないのだら  
うか、という疑問なんです。どうしてかと言  
いますと、一九七〇年に彼は、ソ連が日本の  
独占資本と貿易しているといって非難してい  
るんですね。ところが七一年からは日本の独  
占資本のリーダー達を中国に招き出します  
ね。七二年の四月には平壤に行って、日本の  
軍国主義はすでに復活したと言っています。し  
かし七二年以後は、もうそれは言わない。特  
にレストン(ニューヨーク・タイムズ主筆)  
と論争したあとには言わなくなりました。  
そういうふうには彼ほどの実力をもった偉い  
人でも、時の流れに発言を支配されるんだら  
うかというのがぼくの疑問なんです。それと  
も彼は、なにもかも承知した上で芝居をやっ  
ていたのだろうか。どうですかね。

## 日本人と日本国家の起源についてポリネシア学の立場から大胆に問いかける

# 日本古代学への設問

●我々日本人は三世紀に、フアイウエスト民族の洗礼を受けていた  
「日本人とは何者か」の物的証拠として、イースター島  
古墳遺跡オロンゴの太陽観測装置のヒントから出発  
し、三輪山及び大和三山を竟至春秋分冬至の極限太

陽位置に整列するように整形・造営し、今の神武陵  
の位置を複雑な天文学上の手続を経て決定したデマ  
テラ族の功績を、酒船石の謎を通して実証した。

附「イースター島の考古学」  
八木力雄著 A5判 二六頁、三〇〇四十二四〇  
要 魏志倭人伝についての設問 前方後円墳に  
摘 づいての設問 ①イースター島の考古学 ②三輪  
容山・大和三山の太陽都市コンプレックス ③イ  
内「イースター島の絶対年代について」他

カネソウ匠事 電話03 (813) 3-2180468  
東京文京区本郷3-2-180468  
新宿紀国屋他で発売中

中嶋 なにやら後者のような気がしますね。  
 衛藤 そうすると日本の軍国主義は復活したと言った時でも、彼は日本の実情をよく知っていて、そんなことはない知りつつ、とにかく佐藤内閣をつぶすために、あえてこういうこと言うんだと、はっきり意識してやっただらうか。

無念の死

中嶋 私はそれほど周恩来というのは遠大な構想を持った政治家であって、ですからある意味では文革以後の激動、それから先ほどの「五七工程」紀要なども含む問題をそこまで見越していたんだと思うんです。日本から訪問する政治家などに対して、あの忙しい人が客の出身地などを事前に調べておいて、会見の際に郷土の話題を出すでしょう。そうすると日本の政治家はもうそれだけで大変感激しちゃう。いつも神経をピンとはっているそのキメの細かさというものは大変なものです。彼自身がすべてを賭けている中国の政治の中において、そのキメの細かさを忘れるはずがない。あるいは外交においてもで

す。周恩来というのはそういう点で、遠大な構想と目前の些事への配慮とをともに忘れない戦略家じゃなかったかと思うんです。ただそれが晩年の一、二年です。特に十全大会を一つのピークにしてそれ以降、昨年の一月の全国人民代表大会を最後の場面として、いわゆる周恩来の戦略は結果的に挫折した。ある意味では、それほどまで緻密な周恩来であったけれども、そのことが文革派に気づかれて以来、いわば政治の実権から棚上げされた。病氣もあつたでしょうけれども、そういう事情があつたような気がするんです。ですから周恩来は非常に無念だったろうと思

うんです。もしも死の病でなければ、再び潮流をつくっていくチャンスもあつたらうし、毛沢東が先に死ねば、もつともつと彼の構想が実現できたんじゃないか。

衛藤 その遠大な構想って何ですか。

中嶋 言ってみれば非毛化です。デマオイゼイションです。

衛藤 その場合の Maoイズムってのは何？  
 中嶋 毛沢東崇拜。そして毛沢東政治そのものです。  
 衛藤 毛沢東崇拜を消していくわけ？ 周

恩来が？

中嶋 ええ。

衛藤 周恩来の遠大な戦略が毛沢東崇拜を消していくことだとすれば、これは林彪以上の陰謀を持っていたことになる。(笑)

中嶋 周恩来はそういう意味で大きな存在だったけれども、今回、病に斃れた。しかし彼の構想はすでに一年くらい前からジワジワと外濠を埋められてしまつておりましたから、周恩来の死自体を契機にしては、政策的に中国の外交政策なり、当面の内政がドラスティックに変化する、あるいは文革派が新旧実権派や穏健派を押しつけて再び勢いを得るというようなことは、起らないんじゃないかと逆に考えるわけです。衛藤先生の論理からしますと、穏歩と急進というサイクルは、今後とも続くわけでしょうか。穏歩も急進も目指すところは富国強兵だとおっしゃった。この富国強兵策の中へ、穏歩と急進というサイクルはビルト・インⅡ組みこまれちゃうわけでしょう？

衛藤 そうです。穏歩も急進もともに富国強兵という点では意見が一致している。急進派だって生産力を上げたいと思う。しかし彼

ら急進派は、たとえば姚文元にしても張春橋にしても、以前はナイーブに、下部構造が変わったんだから上部構造も変わらなければい

かん、上部構造が変われば社会主義において生産力は上がるはずだと考えていたでしょう。しかし政治の責任の衝に当れば、どこもいそうはいかない、ということも心得てきている。それから逆に鄧小平や譚震林や李井泉や羅瑞卿にしても、思想的訓練を不要だといっているのではない。それをやると同時に、軍の近代化をやるべきだ、ゲリラ戦だけではダメだということで、羅瑞卿は大論文を書いたわけで、だからそういう精神的な、思想的な訓練そのものを不必要だと言っているわけではもともとないんだから、その意味では穏歩も急進もニエアンスだけの違いになる。富

国強兵策をとっている限り、穏歩と急進の振り子の揺れというのは小さくなるだろうと思

うんです。だけどこれからだって揺れがないとは言えませんよ。たとえば一九七二年から七五年三月までの間に、中国は二十五億ドルくらい自由圏からプラント輸入をやっている。これは中国のようにGNP比六パーセントくらいの貿易額しか持っていない国としては、大変な負担です。よくはそれに對する揺り戻しはあると思

期と文革——そこまでは穏歩と急進のサイクルがいろいろありましたけれども、七〇年代初頭の、対内的には文革・林彪事件の收拾、対外的には米中接近というところが今日の中国にとって大きなターニング・ポイントだということですか。

衛藤 やはり文革ですね。米中接近は、そこから出てきたわけで……。

中嶋 それが急進的なエネルギーの最後の爆発であったという……。

衛藤 そんな感じですね。中嶋 わたくしもその点では同感です。もはや今後ああいふ激しい運動は起らない。これからはいくつものイデオロギー・キャンペーンは起ると思いますが、いずれも尻すばみで終息してしまっています。

シエイクスピア夢物語

中山俊一 著

眠られぬ夜の

沙翁夢譚

思いもよらない発想と展開、奇想天外な悪役や端役たちの言動、とてつもなく楽しいモノログ、登場人物のセリフの裏にある深謀遠慮——本書に語られる一話一話には、教壇や類書から学びとれない人間味あるシエイクスピア像の投影があり、深い理解のための豊かな示唆があります。

新刊(二月刊)  
 イギリスとアメリカ  
 —愛憎の関係—

S.S.エンダー著  
 徳永暢三訳  
 二、〇〇〇円

東京・新宿・神楽坂  
 研究社

衛藤 去年の春でしたか、文化の分野にだけ批林批孔を限れという論文が出ましたね。

### 周以後の中国外交

編集部 そうしますと、どうやら周恩来の死を契機にしては、大きな国際的な流れの変化はないと考えてよろしいでしょうか。

中嶋 この一年ぐらい、すでに中国の内政、外交は、周恩来亡きあとの中国を組み込んだ政策だったと思うんですね。後継リーダーシップにおいても、そういう形で準備されてきておりますから、毛沢東の死まではあまり大きな変化はない。ただ、周恩来ほどのキメの細かい配慮をする政治家がいなくなったことによって、ギスギスした関係が出てくる気がします。たとえば覇権問題にしても、もしも周恩来がこの問題を担当していたら、もっと違った形になっていたと言えるんじゃないでしょうか。

衛藤 すでに彼は病院に入りましたからね。彼ならもっと円満な形で、こういうふうなデッドロックに乗り上げない形で処理していたかも知れない。

中嶋 覇権問題を見てますと、実際の担当

者は外務次官である韓念竜であり、喬冠華外相であり、さらには鄧小平副首相だったと思うんです。特に喬冠華が今まで周恩来がやってきたことを代行していくと思えますが、むしろ周恩来よりも手ごわいんじゃないか。

衛藤 そうですね。喬さんはドイツ留学だし、もともとが新聞記者で、抗日統一戦線ときは武漢で記者をしていたし、国際感覚は十分にある。だから本人がそういうきくしゃくした硬い人かどうかわからないけれども、こういう言葉があるでしょう。プチブルはプロレタリアート以上にプロレタリアートのに振舞おうとする。喬さんの党における地位は文字通り低い。官僚でしかないと思うんです。周さんみたいに、革命の鉄火の下をくぐってきて、ある意味では自分で判断できる自信と、プレステージ(威信)を持っている人とはずいぶん違う。だからある路線に対しては、原則主義を守って忠実であろうとする。路線からはずれても、中国の利益のためには

ここで妥協しておいたほうがいいのか、そういう自主的的判断をするだけの経験も権威もなっていないですか。しかし対日政策というのはどこで決まるのですかねえ。

中嶋 わかりませんねえ。

衛藤 中央政治局の常務委員会あたりでも、ずいぶん議論になることがあるんじゃないかと思うんです。するとそこでは張春橋とか姚文元とかいう連中もいます。康生は死にやっただけです。

中嶋 いままで周恩来だったんですけどね。そうなるからには、やはり鄧小平じゃないでしょうか。

### 中国外交の得点失点

中嶋 この一、二年、中国外交は、マイナスの得点をあげていると思うんです。なにか精彩がない。ハノイとの関係にしても、あれほどベトナム戦争を支援してきたにもかかわらず、ハノイに楯突かれて、さっぽ向かれてしまった。かつて六〇年代前半に、キューバ

のカストロ路線を、フルシチョフを批判しながら、さかんに支持した。これはまさに毛沢東外交というか、アジア・アフリカ民族解放闘争重視の路線からして、中国にとっても大事

なところだったと思います。にもかかわらず、キューバにも背かれていく。それに次いでベトナムの難反です。この二つの「喪失」は、中国外交にとって大きな失点だと思うんです。

ハノイがあればほどはつきりと意欲に態度を変えていった背景についてですが、そのウラには、かつてスターリンが中国革命勝利後の毛沢東に対して内政干渉まがいの要求を出して、毛沢東がすごく怒ったことがありましたね。あれと同じような、われわれの知らない隠されたことが、サイゴン陥落以降、北京との間にあったんじゃないかという気がするん

です。端的にいうがっていえば、ソ連と手を切れとか、そういう干渉があったんじゃないか。

衛藤 それは昨年三月の江青の演説が本物だとすれば、あの中ではつきり出てますね。ハノイの指導者たちは修正主義者である、という判断が例の演説にありますけれども、今例にあげられたことについて資料の示すところでは、毛さんの意図で中国の外交がうまくいかなかったと言わなければならないかな。

中嶋 そうです、毛沢東外交です。

衛藤 そうすると、それは周さんがいた過去もそうだったし、いなくなったこれからもそうじゃないの。

中嶋 そうですね。グロムイコが来日したこの大事なときだというのに、陳楚駐日大使は帰国したきりで、館員たちはいつ大使が帰

ってくるかわからない状況で、在日大使館員の士気はふるわず、とても外交どころじゃないという話も聞きますね。

衛藤 まあ米中緊張緩和をやりとげて、中国外交はいまちょっと中だるみなのかもしれないですね。ただね、一見あなたのおっしゃることはもっともだと思うけど、七一一七四年にかけて中国外交を見ると、米中接近は毛さんの決断だった。ついで日中国交正常化。そしてマレーシアと国交回復し、タイ、フィリピンとつづく。パングラデシュの問題を処理し、自由圏との間にもすごい貿易をつくり上げた。この十年間の伸び率はすごいです。六四年に三十一億だったのが、昨年は推定百四十億ドルを越して、平均すると年一六・三パーセントの貿易伸び率です(この期間日

### 増刊 いんなあとりっぶ

### 豪華カラー写真集

12月20日発売・A4判・260頁・1800円



### 映画の美

らくがき帖 和田誠・渥美清・アメリカ建国二百年特集・スター絶品シーン集 荻昌弘他

いんなあとりっぶ社 東京都港区麻布台1-9-3

本は年二三パーセント)。これは第一次五年計画のときより高い。あのときは一五パーセントぐらいだから、これは広い意味で中国外交の成果じゃないでしょうか。

中嶋 もちろんそうですね、それは「国家外交」の次元における成果であって、それが高ければ高いほど、毛沢東路線なり中国の「革命外交」は、ある意味での批判を受けざるを得なくなる。いくら第三世界外交といっても、中国自身は石油があるんだからいいですが、キューバあたりから見たら一体何だということになる。意外に中国は、西側との外交の次元で成功しているが、本来考えられてきた第三世界外交という点では、どうもうまくいっていないような気がするんです。

### 周恩来と蒋介石

衛藤 いま国家外交と毛沢東路線とを區別されたけど、コミンテルンの第二回大会の植民地民族問題に関する決議は、まだ生きていますか。

中嶋 中国を見る限り、それは生きていないと思います。

衛藤 統一戦線の理論は？

の民衆のためとか、世界の労働者のためにといった精神はもうなくなっていると思えます。コミンテルンの植民地問題のテーゼも統一戦線の論理も、すでに中国においては死んでいるんじゃないか、といった意味でさきほどああいうお答えをしたんです。

衛藤 そういう基準をたてますと、スターリンの時だって死んでいますよ。(笑)あの当時だってスターリンは、現実には自分の生きている時代に世界がすべて社会主義化するなんて思ってもみなかったらうと思います。彼の頭の中にはソ連を強くすることだけがあつたらうと思う。だからヤルタ会談のときに、日露戦争の仇をとらなければ、といったナシヨナリスト的表現をしているわけですね。私はイデオロギーとか思想とかいうものは、政治の世界ではひとり歩きすると思うんですよ。

### 一つの時代が終わった

わが国の社会党にしても、非武装中立はどういうものでもないというところは六〇年代からわかっていたわけです。けれども、イデオロギーがひとり歩きしてイデオロギクスとなり、それをこわすことはタブーとなる。そのイデオロギーを崩そうとすると、そういうの

中嶋 それも、いまの中ソ対立の状況の中では有効性がないんじゃないでしょうか。

衛藤 そこで私と意見が少し違ってくると思うんです。右の決議はブルジョアジーが革命的である間は、そのブルジョアジーとプロレタリアートは共同して闘うという考え方で対抗するためには、反ファシズムのあらゆる要素と共同する。

中嶋 コミンテルン第七回大会の路線にながらるわけですね。

衛藤 ソ連はスターリン時代に、国家とコミンテルンを使い分けることによって、成功してきたと思うんです。ソ連政府は相手が反動だろうが、必要と見ればこれと仲よくし、片一方で革命の政党であるコミンテルンが革命勢力を支持する。その使い分けは、中国の対外政略においても、いまも脈々として生きてるんじゃないか。中国の場合は北京政府と中国共産党を使い分けてる。北京政府は外国政府と善隣友好外交を展開して味方をふやし、中国共産党は外国の革命勢力を支持する。だから中だるみは認めますが、その布陣は着々としてできてる。

中嶋 その布陣というのは、中国共産党の中で、毛沢東がその戦略を考えているということでしょうか。

衛藤 そうです。

中嶋 おっしゃることはよく分るんですが、その場合、そこには何か最終的にインターナショナルイズムとか、世界革命への忠誠とか、そういうものがなければいけないわけでしょう。植民地民族問題の決議を先生がお出しになったのは、おそらくレーニンの考え方の背景には最終的には世界革命というヴィジョンがあり、そしてプロレタリアートのインターナショナルイズムというイメージがあった、そういうものが戦略的な根本にあつて、どちらかというとな戦術的な次元で二つの政策が出てきたというお考えからだと思うんです。しかしどうもいまの毛沢東なり中国共産党においては、世界革命の精神とかプロレタリアートのインターナショナルイズムといった精神はすでになくなっている。

中国というのは、ソ連もどよりそうですね、国益とか中国のプレステイジとかそういう国家エゴイズム、民族エゴイズムにいまや完全に墮しているのではないかと。

中嶋 よくわかりました。最後にもう一点、毛沢東と蒋介石とがいつも両雄みたいな形で位置づけられていますけれど、さきほどの西安事変もそうなんです、実際には周恩来と蒋介石という組合せのほうが、中国現代政治史のうえではより核心を突いているような気がいたします。蒋介石が黄埔軍官学校校長の時に周恩来は同校の政治部主任代理でした。その時の周恩来の非常な有能さを蒋介石は知っていたからこそ、上海クーデタ前後の時期に周恩来を捕えるわけです。ところが彼はうまく逃げる。それが十年後の西安事変でもって再び行き合う。ですから毛沢東と蒋介石より周恩来と蒋介石という組合せの方が、現代中国の楯の両面を示す運命的な組合せだと思えます。建國後、台湾をどうするかという問題の時にいつも前面に出てきたのも周恩来です。そういう意味で、この二人がこの一年くらいのうちに相次いで亡くなったことは、毛沢東の運の強さと同時にたしかに一つの時代が終わったということを感じさせますね。

は修正主義だとか墮落思想だといってキメつけるこわい知識人が出てくる。そうキメつけられることを政治家はいやがりますよ。その結果、演説ではつい非武装中立とかなんとか言ってしまう。

同じように天皇制だって、天皇が現人神だなんていうのは、昭和初期の將軍だって考えていなかったですよ。ただ思想がひとり歩きするから、それが政治力になってしまふ。みんなが天皇現人神だというふうに言っていたわけですよ。反中国とキメつけられるのがこわいばかりに、心にもないお世辞を中国めがけてふりまく人が沢山いるでしょう。その点をご理解いただきたいんです。(笑)

中嶋 話を周恩来論にもどしますと、その点ではおそらく、毛沢東も周恩来も……。

衛藤 同じだと思います。鄧小平も……。

中嶋 しかもその場合に、周恩来という干渉者としても政治的調停者としても、対外折衝者としてもあまりにも有名な人物が、ここで欠落したということは、中国にとって非常に手痛いことですね。

衛藤 技術的には痛いと思います。ただ冒頭にあなたがおっしゃったのに賛成したの

# 諸君!

昭和51年3月1日発行(毎月1回)日発行  
第8巻3号 ■昭和50年2月28日国鉄首都特  
別採来誌誌は第二一六八号昭和44年8月2  
日第3種郵便物認可

- 特集 周恩来以後の中国
- 江青夫人伝 フリッツ・モイラー
- 特集 北方領土問題の核心



3